

んで自は「弟子一人も持たず候」と云つた親鸞が頻に弟子と言ふ語を用ふたり）雑修として親鸞が嫌つた祈りをば屢々行はせたりしてゐるのも耳障りだと云へば云へやう。が、いかなる缺點があるにしても何よりも尊いものは眞面目なる魂の聲である。であるからその眞面目なる魂の聲に充ちたこの作者に對しては私は最早やこの上批評がましく言ふことを避けたいと思ふ。そしてたい、輕浮なる作品のみ歡迎せられる今日の日本に於て私はかゝる眞摯なる作者を心を罩めて推奨し且つ前途有望なる氏の健在を祈るだけに止めやうと思ふ。（東京市神田區南神保町十六番地岩波書店發行定價一圓）（岡本春彦）

儒家哲學本義

内 田 正著

此書は著者の男旭文學士の序文にある如く「儒學大綱」と「儒學精義」とを主要なる部分とし、「儒學が西洋哲學最近の趨勢と其の揆を一にする所以を明にし、儒學の價値を世に知らしむる」ために公にしたものであつて、著者の特に意を注いだ點は「儒學の本領を明にすると共に儒學に於ける致知道體の問題は實に西洋哲學の知識問題、價値問題なること」を高調することである。

今此書の目次を見るに、上卷は儒學大綱であつて人學、道學、心學、理學、儒語字義考の諸章があり、下卷は儒學精義で、致知類、道體類の二つに分れて居る。更に附録として「儒教主義大發展之趨勢」朱子學研究序論及題目」を載せてあるが、前言したやうに此書の主要部は前二篇であるから私の紹介も此の二編に限るのは勿論である。先づ儒學大綱より述べれば、此の篇は著者自身

の考ふる儒學の根本の主張を明にせむとしたものであつて、著者の自序によれば「東西の學問を研究し參互思索し、反覆沈潜し十餘年を経」たる後、得たる所を表明したものである。著者は儒學を人學、道學、心學、理學の四類に分ち、各類に各々本領ありとして古聖の類語を列擧して其の大體を示して居る。人學に言ふ人とは生物學及社會學に屬するものであつて、或は之を人道論とも言ひ、儒學大綱中の第一類には此の人學のことに就いて述べ、主として人と道、私と公との別に關する儒教の經典の文句を引用してある。第二類は道學又は智仁論であつて、倫理道德を研究するもの、無作用、有作用、仁、義、禮、智、勇、明、誠、聖等々關する經文を列擧してある。著者は道學を今日の主觀道德學に相當するものと言つて居る。第三類は心學又は知行論であつて、無作用と有作用、知と物、我と物、知と意、誠と力とに關する經文を揭示して居る。心學は今日の心理學及認識論に相當するもので、道の心的觀であると言つて居る。第四類は理學又は理氣論であつて、形而上と形而下、道と器、性と情、理と物、道と物、性と氣、道と事、理と氣、性と生との別に關する先哲の諸語を掲げて居る。著者は理學を今日の價値哲學及び形而上學に相當するものと言ふ。儒學大綱には此の四類に就いての説明の外に儒語字義考、及有作用と無作用、形而上と形而下の對字一覽表、形而上下分合表、道學と心學、理學との關係圖、規範と自然法則との關係圖、道學範疇圖式、理學範疇圖式とが載せられ、各々簡單な説明が附記されて居る。次の儒學精義に於て特に著しく現はれ居る著者の努力、即西洋哲學者の所説を以て儒學を説明せむとする努力は

大綱にも現はれ、著者は此編の凡例に「人道とは人我の上に天我を行はむと欲するもの、性とは *Instinct* の實踐理性に同じ、氣とは自然科學の物活論に近し、形而上とは内界の理性より自發する觀念なり、自然とは主觀に於ける先天的要求にして理性の發見なり、心理とは人間固有の道理即理性なり」と説明して居る。

著者は程朱學を修め、身を律するにも此の學を以てして居て其の學問の理想は「程朱に歸る」ことにあるとする。第二篇の儒學精義は其の考へを以て作つたもので、其の叙述の體裁は近思錄に模し、致知類(知識問題)、道體類(價值問題)の二に分ち、古聖賢の語を列舉し、之に哲學上の術語を附してある。之を附したのは著者の考へでは「傳東西今日之學者知儒學之有先於哲學而既深精微者焉」ためである。

致知類の條にては耳目の官と心官との別、知(その一、思得、致知、覺、良知)、知(その二、明辨、是非、智、自有之理、知)、知(その三、知と行との關係中知先行後の論、知(その四、知主行從の論、眞、意、幾、知、智、志、理)、知(その五、知行俱在の論、理氣俱有の論)、知(その六、格物致知の論、格物、窮理、物理)の諸項に就いて述べてある。著者は耳目官を感覺、心官を思惟に當て、學は科學、思は哲學、知は良知にして超越知、得、明、覺は認識、明辨は批判、智は價值範疇、智之始とは先天的價值範疇、智之終は後天的價值範疇、意とは意欲、と各々儒教程朱の學語を近代の哲學上の術語に當ててある。次に道體類をは價值問題なりとし、道體に就いては道體は又性理であつて自然を以て言へば天、我心を以て言へば性、自然を以て言へば公、欲すべきを以て言へば善、

當然を以て言へば道、條理を以て言へば理である。然し其の實は只一體であるが故に其の一を擧ぐれば其の餘は皆在るのであるが、然し此等は認識の境界を越したのではない、と言つて居る。此の篇で(一)心と性と情との別、(二)天、(三)性、(四)公、(五)善、(六)道、(七)理の諸項に就いて述べ、心とは存在意識であり、性とは價值意識である、従つて心と性と情との別といふことは意識、理性、知情意の別を言ふ。天とは又天道、天命、自然、實然、所以然と同じでカントの無上命令である。本然とは先天、超越、先驗であつて、良心とは先天理性である。性とは天我で超個人的の自我を言ひ、道心及明德は規範意識であり、實體とはプラトリーの所謂觀念である。天とは又普遍的規範である。公及公共とは普遍のことであつて、心之同然とは意識一般である。孔子の言ふ性とは先天自發で、習とは後天經驗である。禮とは客觀的妥當性である。善美とは眞善美に當り、和、中當とは妥當、又は價值に等しい。道とは普遍妥當的目的、矩、節、則とは規範、當、合當、不容己は不許不である。理とは意味なり。大本、大極、道體は價值根本又は絶対價值のこと、條理とは理想又は要求假定である、と言つて居る。

要之、著者は儒學の正統は程朱の學であつて、程朱の言つて居るところには今日の西洋哲學殊に現代新カント派又は論理派で論ずる諸思想が含まれて居ると考へて此の書の如き試みを行なしたものである。程朱の學を以て儒學の正統とし、程朱の語を斯の如く西洋哲學を以て解することの詳細な點に就ては尙種々異論の餘地があると思ふが、併し一方儒學の眞髓に徹すると共に他方軌近西洋哲學の光明に照して之を觀んとする此老儒の眞摯なる努力に對

しては敬服にたへない。終に臨んで著者に希望したいことは、此書に記したことは著者自身には充分理解があり統一があるであらうが、讀者によく理解させるためには今少しく説明を充分にしておらうことである。それから語句の出典をも明記してもらへば尙好都合と思ふ。(定價金壹圓岩波書店發行)(浦川)

寄贈書籍雜誌

出家とその弟子 倉田百三著 岩波書店
 新著梗概第十二輯 文學博士 中島力造編 目黒書店
 哲學雜誌、思潮、丁酉倫理講演集、心理研究、六合雜誌、密宗學報、東洋哲學、無盡燈、東亞之光、早稻田文學、學校教育、教育、内外教育評論、普通教育、小學研究、教育研究、教育界、教育時論、三重教育、愛知教育雜誌、長崎縣教育會雜誌、信濃教育、宮城教育、愛媛教育、

前 號 目 次

宗教の社會的表現に就いて……………	文學士	宇野圓空
神社と宗教……………	文學博士	松本文三郎
ニイツエの學制論……………	文學博士	小西重直
感情に關する諸問題(完結)……………	文學士	千葉胤成
美學の基礎に就ての考察(承前)……………	文學博士	深田康算
彙報		